

ボランティア活動「ハンズオンプログラム」と

NIE の実践に関する一考察

佐々木 孝夫¹

実践報告

近年、小中高において NIE を利用したアクティブ・ラーニングが盛んである。本学でもキャリア教育の中にハンズオンプログラムをつくり、今後大学教育で期待されているアクティブ・ラーニング、キャリア教育の在り方について、検討している。

ボランティア活動等を核にしたサービスラーニングは、キャリア教育にとって不可欠なものである。「ハンズオン(Hands-on)」とは、文字通り「手で触って」というのが元々の意味であり、現在では「体験的な」「直接参加の」という意味合いで使われている。つまり「ハンズオンラーニング」とは「具体物を通した、手や体を使った体験的な学び」といえる。NIE 活動同様、社会を知り、自分を知り、自らの将来を考えることを目的とする活動である。NIE 活動が、言語活動におけるアクティブ・ラーニングであるとしたら、このハンズオンプログラムは、人と人、コミュニティ、社会との関係に関する実践活動である。

また、本学では平成 29 年度より「大学生のための県内企業魅力発見事業」を開始する。その内容は、「企業が参加する大学での課題解決型授業を通して、学生に県内企業で働く魅力を伝えるとともに、働く意識を高めるもので」県内大学の 1,2 年生を対象に授業が行われる予定である。埼玉県ホームページによる紹介記事は以下の通りである。

企業参加型授業（企業が大学に出向く授業）

県内企業の社員が授業に参加し、企業が直面する経営課題を学生に提示します。グループワークにより学生が提案してきた解決策を企業が評価します。授業を通して、県内企業の魅力を伝えるとともに、学生に「社会に必要な力と自分が持っている力」とのギャップを認識してもらい自ら主体的に学ぶ姿勢を身に付けてもらいます。

(参照 <https://www.pref.saitama.lg.jp/a0809/kigyou-miryoku.html>)

このような企業、行政（地域）等と連携した課題解決・企画提案型のプロジェクト学習科目及び実践型のインターンシップ科目の開発 <PBL 型・アクティブ・ラーニング>は、年々大学教育で増えてきている。

PBL 型アクティブ・ラーニングを小中高で実践する上では、注意しなければならない点も多い。その困難な部分について NIE 活動を通じて、社会の問題点を理解することは、2020 年以降に予定されている入試制度の改革などに必ず役立つ。

本年も昨年度同様、受講生に様々な NIE の実践として各チームで制作物作成を実施した。

¹ 平成国際大学准教授

資料写真①のとおりである。各チームの構成は、ランダムなものであったが、最初から小学、中学、高校と分けるか、各担当科目で分ければ NIE の制作物目的も明確になったかもしれない。アクティブ・ラーニングの手法を用いて、初めて会う者同士の緊張感を解きほぐしていく「アイスブレイク」²の手法を採用することができたと実施後おもった。この点については次年度以降実施する。具体的にはフリップ自己紹介、共通点探し、ランキングゲーム、人間マトリックスを採用する予定である。

逆に、バラバラな個人の集まりから、新たなコミュニケーションが生まれる可能性もある。実際、この後者のほうが今回の免許講習 NIE の特徴となった。うまくリーダーを決め、制作物を進めるチームもあったが、当初は全く予想していなかったが、受講生である先生同士のコミュニケーションがうまくいかず、リーダーへの反感が生まれていたチームもあった。このチームのメンバーに、話し合いの場をもってもらって「もしこれが、実際の生徒、学生ならみなさんどうしますか。すべての物事、人と人の関係はスムーズにはいかない」「このうまくいかない部分をうまく導く人こそ教師だとおもいませんか」のようなコメントを相互に交換した。ファシリテーターの重要性をつたえ、集団と個人の関係について考え、協働の大切さを感じ取ってもらった。

ファシリテーターとは、ファシリテーションを専門的に担当する人のことをいう。ファシリテーター自身は集団活動そのものに参加せず、あくまで中立的な立場から活動の支援を行うようにする。例えば会議を行う場合、ファシリテーターは議事進行やセッティングなどを担当するが、会議中に自分の意見を述べたり自ら意思決定をすることはしない。

会議、ミーティング等の場で、発言や参加を促したり、話の流れを整理したり、参加者の認識の一致を確認したりする行為で介入し、合意形成や相互理解をサポートすることにより、組織や参加者の活性化、協働を促進させる手法・技術・行為の総称。

そのほかの主な講義内容は以下の通りである。

- ・ NIE の 3 要素である「新聞活用」「新聞を作る」「新聞の機能を知る」
- ・ 社会性豊かな青少年の育成、理想の民主主義社会にむけ新聞業界と学校教育が中心となって 85 年以降実践活動
- ・ 読解力向上、コミュニケーション力能力の育成、情報活用能力の育成により社会への興味関心の喚起をもたらす
- ・ 学校図書館のもつ社会との接点 N I E の学びは教室だけでは終わらない
学校図書館機能、N I E 実践の共通点を相互に生かし、連携する必要がある。

参考資料 ①http://www.pressnet.or.jp/statement/100121_478.html

² https://www.faj.or.jp/modules/contents/index.php?content_id=27 (2017 年 2 月 27 日参照)

学校図書館(室)での新聞配置状況を調査、小中は3割台

2010年は「国民読書年」。文字・活字文化推進機構は、国民読書年の事業計画の中で、「子どもの言語力育成」活動の一つとして、「学校図書館新聞配備5か年計画」(仮称)を掲げています。これは、全国の公立小、中、高校に複数紙を公費で配置するというものです。昨今、新聞を読む効果として「読解力の向上」が挙げられています。新学習指導要領にも「言語活動の充実」「新聞活用教育」が明記され、小学校で2011年度、中学校で12年度から実施されることになりました。NIEの意義はますます高まっています。しかし、NIE実践校数は全国学校数の約1%。学校現場で教師や児童・生徒が新聞を手にとることができる環境がどの程度整備されているのかはこれまで明らかではありませんでした。

学校図書館新聞配備状況

【新聞の配備状況】

小学校 27年度 41.1% 26年度 (36.7%) 中学校 37.7 (31.8) 高校 91.0 (90.0)

NIE 実践指定校

(96年から始まったNIE推進協議会加盟新聞社による補助認定校)

小学校 228 中学校 187 高校 116

・主権者教育の充実と NIE

主権者教育（選挙制度、模擬投票、合意形成、メディアリテラシー、民主主義）
公職選挙法改正（選挙権年齢 18 歳以上に）にともない NIE の果たす役割を再考
図書館に複数新聞の比較をするため是非とも新聞配備を提言（特に地方紙の充実）
図書館における NIE 活動は主権者教育の上で非常に重要で、スマホ世代の生徒に新聞の持つ機能、重要性を認識させる絶好の機会でもある。

・NIE とアクティブ・ラーニングの応用

「新聞を切り抜いただけは、NIE の面白さが、生徒に伝わらない」という講習参加者の学校での体験から、講習時には切り抜き以外に様々な取り組みをおこなっている。

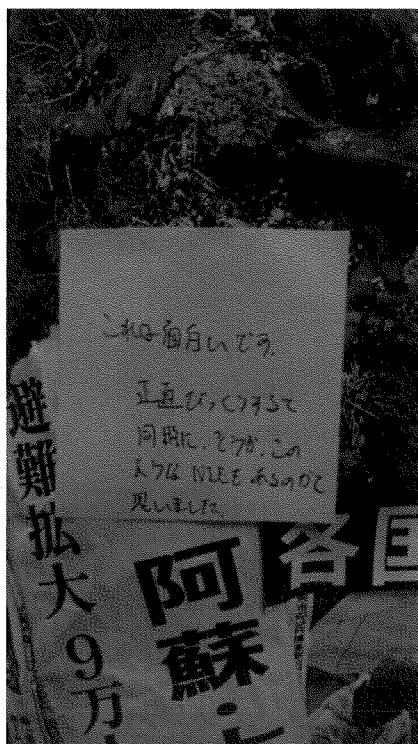
- ①1日の新聞紙を横につなげれば何メートルになるかを測定させる
 - ②新聞紙はかるく、その軽さを利点としてどのチームが高くまで高いタワーを作れるか
 - ③レゴなどのゲームを使用する方法により、新たな授業内容を検討する。
- その中に NIE の項目いれ授業展開を考える。

<資料写真①> 2016年NIE作品

今年度からの取り組みと感想

- *付箋により受講者が評価ポイントカード バッジカードの採用
- *筒形形状 熊本地震の恐ろしさを表現
- *作品だけでなくチームワークも素晴らしい
- *「作りなさい」と命令口調にしないことは重要。各個人の失敗、アイデアを大切に

することが重要だということがわかった。アクティブ・ラーニングと NIE はどの科目でも実施できると思った。(制作者)



ボランティア組織論に基づく防災AL学習指導案

平成国際大学 平成 28 年 7 月 7 日 45 分

場所 [UP 学習センター] 授業者名 [佐々木孝夫]

1. 授業テーマ

災害時のコミュニケーションを学ぶ。ボランティア組織論を学ぶ

2. 学習者

合同 基礎演習 1S 5 クラス 60 名程度

3. 教材

「災害時のコミュニケーションを学ぼう」プリント×人数または班数分

4. 指導

災害時にはどうすればいいかわからない場面、他者と意見が違う場面もある（避難所でお弁当が足りないときなど）。そうしたときは意見の異なる人とも冷静に話し合い、結果を想像しながらよりよい答えを探し、行動しなければならないことを指導する（お弁当を配るか配らないかを決めなければならない）。ボランティア組織論の重要性を多角的に学ぶ。

5. 学習目標

- ・災害発生時の正解がわからない課題に対して、既存の知識経験を元に答えを導き出すことができる。
- ・自分の答えについて論理的な説明を行い、異なる意見の相手と適切な議論ができる。

6. 指導内容

時配	学習内容と活動	指導上の留意点・評価
00:00 - 00:10	導入・関心 ・日常での些細な意見の違いや避難所でのトラブルなどを例（お弁当が足りなくても配るかどうかなど）にして学習成果を意識させる	▲意見の違いは日常的に起こること、災害時には結論を出さなければいけないことを正しく理解させる。 ○マンガの好きなキャラクターやお菓子などを例にしてもよい。
00:10 - 00:40	展開・思考（防災ゲーム） ・ゲーム形式で、気負うことなく災害時の状況について自分なりの意見を考えさせる ・異なる意見に対してもしっかり聞かせる	▲ルールについて正しく理解させる ○ゲームの問いには正解はないこと、正解を探すよりも自分で考え、意見を述べることを重視するよう指導する。
00:40 - 00:45 議論・ まとめ	実践・全体まとめ ・リフレクションシートにより、学習内容を振り返る	○指導まとめ 「災害時には正解のわからない問題が出てくる。自分で考えたり、人の意見を聞いたりしながら、結果を想像して、結論を導かなくてははいけない」ことを指導

実践報告

NIE を使用した学習とともに本校で行っている防災 AL について報告。クラスが公務員志望（警察消防中心）であるため、指導においては「ボランティア」「正義感」などについてオブザーバの先生から指摘があった。

今後は、防災カードゲームを採用し、公務員志望学生にもあった AL を検討する。学生の演習への取り組みは、想像以上だった。合同クラスでは、複数の基礎演習担当教員がお

り、いつもと違う緊張感があったかもしれない。教員からはいつもと違う状況から、各履修者の個性が引き出せてよかったというコメントがあった。

各グループの報告でうまくいかなかった失敗事例もあったが、その失敗、ミスの発見こそが今回のALの目的であり、有意義な合同演習であったと思われる。

<出席者 公開授業 教員 10名 >

【参考資料】

和田修一・佐々木孝夫

選択領域F

「新聞の活用とディベートの可能性～社会問題をどう授業に取り込むか～」

対象：小学校教諭、中学校教諭 高等学校教諭 特別支援学校教諭